鶴亭秀賀作

歌川國周画

へ13
3848
1

へ13
3848
2

鶴亭秀賀作

歌川國周画

義経

加津

賀見

金松堂

春樟

へ13
3848
1

門へ13
號 3848
冊 1

一

水鏡山鳥奇譚初編換序

天地一の大戯場あるべ萬物會小戯場成べ。于粤一の戯場あ。坐元を梓元とる。立物を稗史とも本舞臺三間あるも共合して四冊を規矩とも。

作屋の明に者の腹の皮彼を殺し是を活まの役割まれべ画工ゲ毫ふ振付は色香を配る花道ふ用欅の木ふ登せと。價ハスット引船の高間あるも其計り。去ども藝ハ身を入て。緞令魂魄の如く跡ハ引とも。見酌火の如く立消のもる絆ふ。一切引寫の声色を用ふと。虫蛇ふも識りハ道る呼あるうんを。御見賀厚き省官様方。初編初日の幕明より。大切の大團圓まで。下座の太鼓と鳴渡り永當々の御評判の程偏奉願候

元治二龍集乙丑
孟陬開鏐

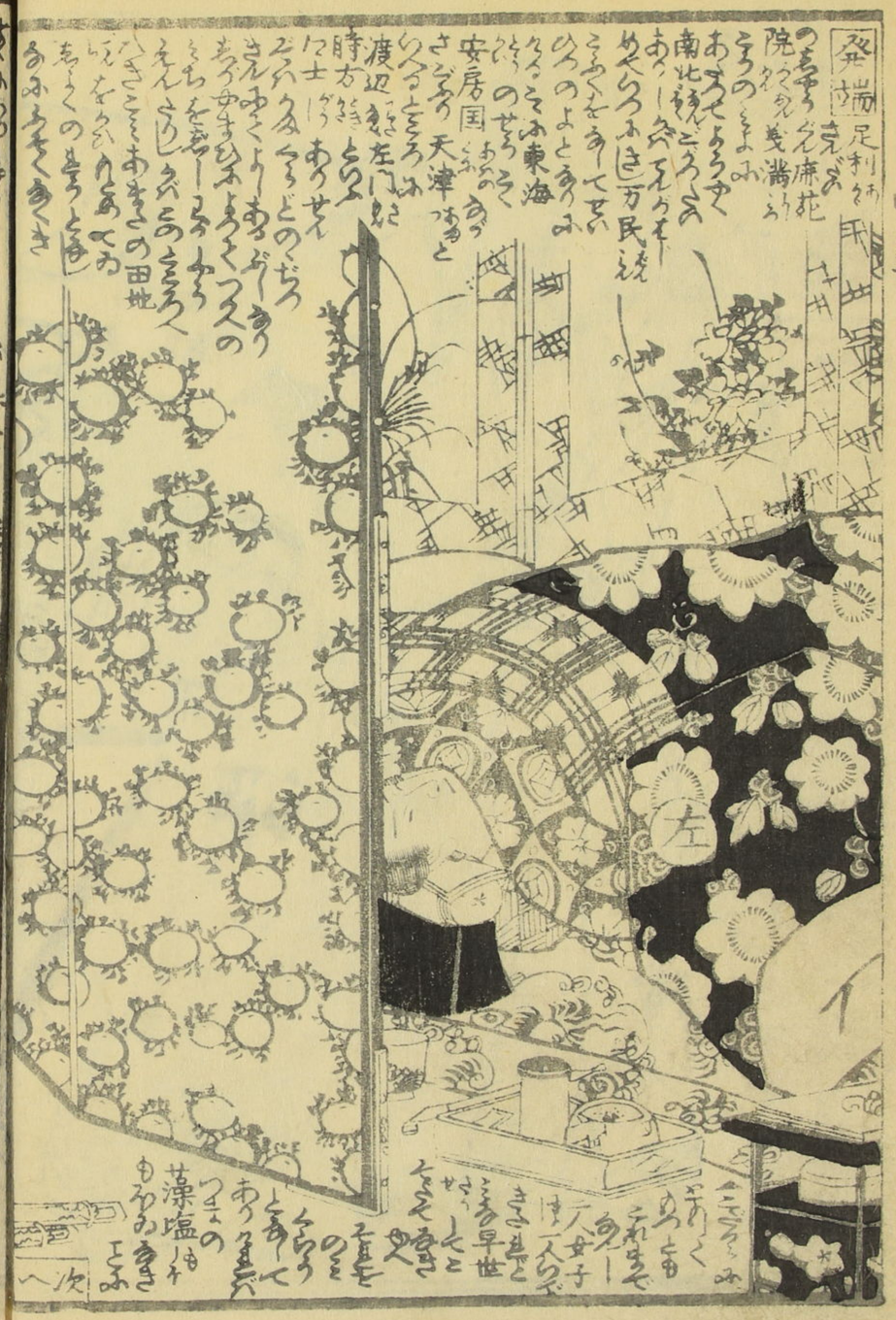
鶴亭秀賀戯記

渡邊左門
老母越路

渡邊左門
妻藻鹽

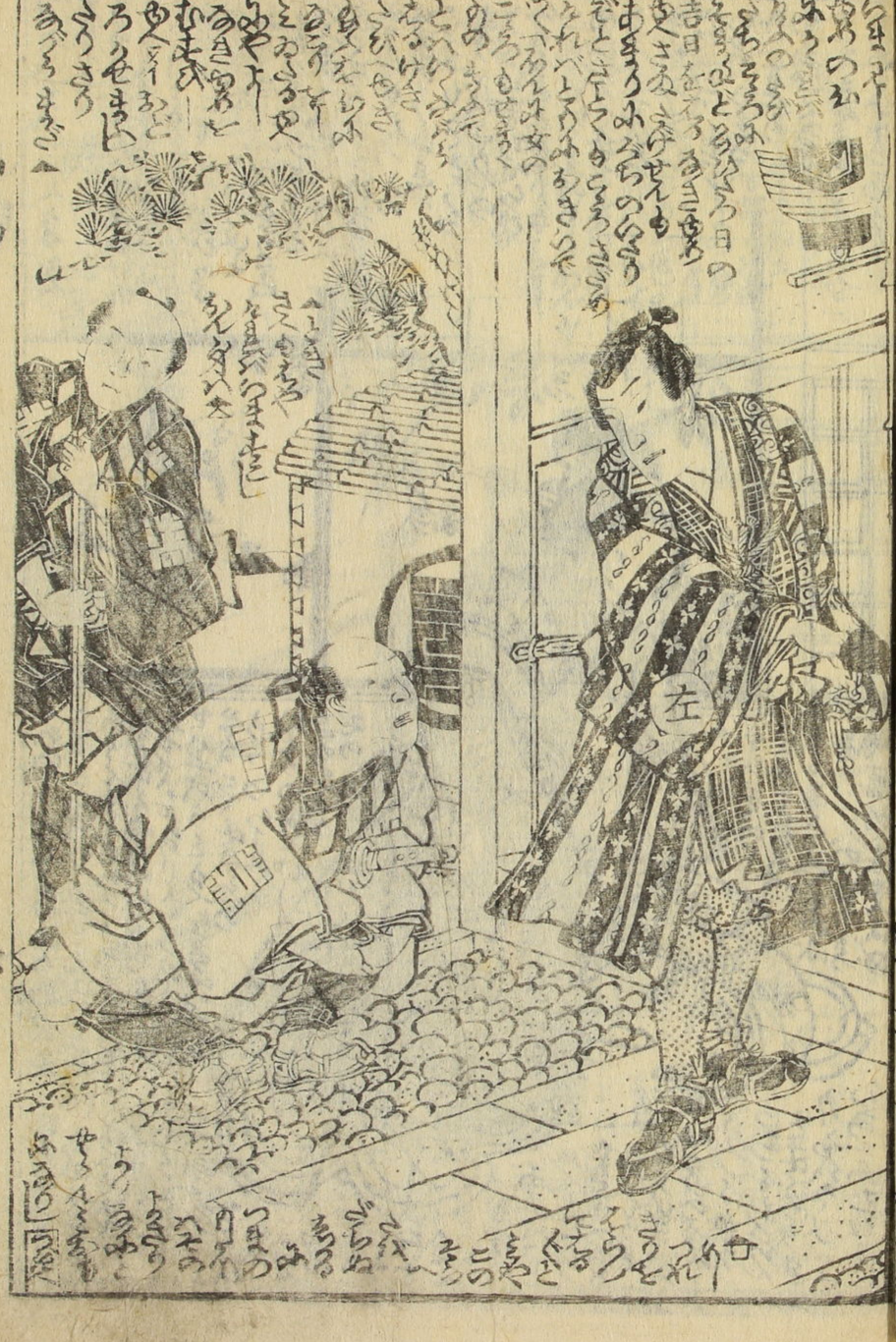
異人未詳

安房国天津の長者
度島左門時方
時方の娘山鳥
実八太郎時員
女牛若と渾名を
潜竜子
重太郎
白須賀の浪人
鷲塚潜龍


左

藻

つづき
時
越
藻



梅林
越
澡

越
涼
左

秀賀作

國周画

左
越

姓名未詳

京
重
山
重太郎

金華七變化 十七編より廿五編迄 鶴亭秀賀著作 梅蝶樓國貞画

右八殊の外御評判宜しく作者重工一世一代の新案新工夫をこらしてあり摺おくれ念を入れ古今の美本と做し一ぺん看官競て高覧をねがふ云

水鏡山鳥奇談 四編 秀賀作 五編 國周画

蓬葉嶋臺延壽盃 偐儡師 三編 魯文作 四編 國綱画

花の御所九重記 初編より秀賀作 追々出版 國貞画

本製子油 日本橋通十軒店 繪双紙 武藏屋勝之助

抑丁子の油八和漢よりめづらしき業にて髪の所枝に諸病を防ぐこと少からず武家様は女中方肝要の業之及物と存てさひくるて髪のつやを出し要ぐ本結ぶよ者ぐ

文 地本雙紙問屋 金松堂 横山町三丁目 辻岡屋文助梓

へ13
3848
2

門へ13
3848
壱 2

水鏡
乙鳥
奇譚
二編 下

都々逸作
一竜亭画
[illegible]
[illegible]

東延堂

換序文

雅文の公服は遠く不及と雖竈の前に裲襠姿の却つて見憎し去迚有來り深摸様は人飽見飽て在へられ唯新形の新たを專一と織出せど褸褸なれども錦と言ふ不叶何も裝衣は針目の多き洗濯物の名は通はせを如何ぬせん

元治元龍集丑陬月

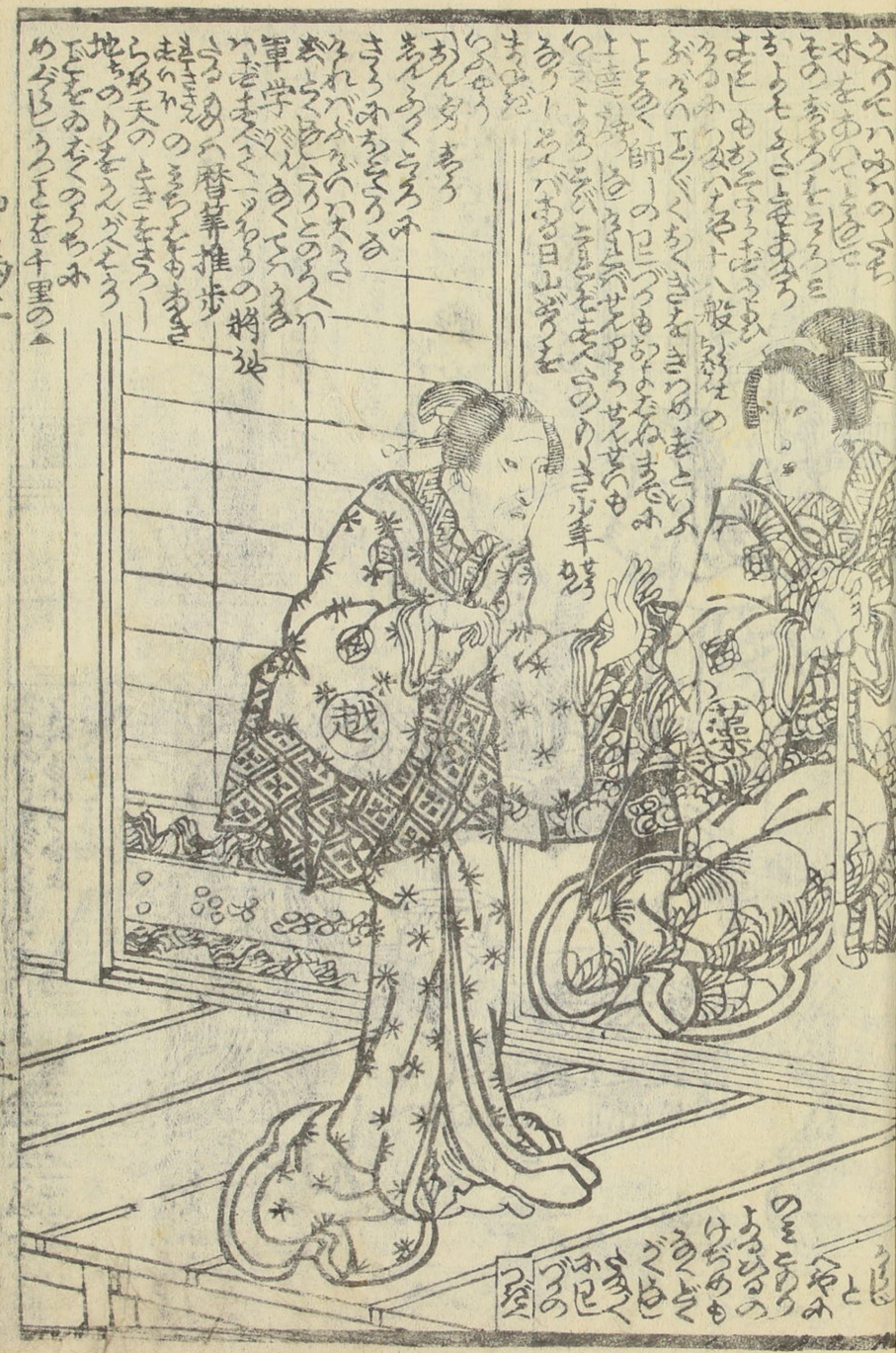
鶴亭秀賀記

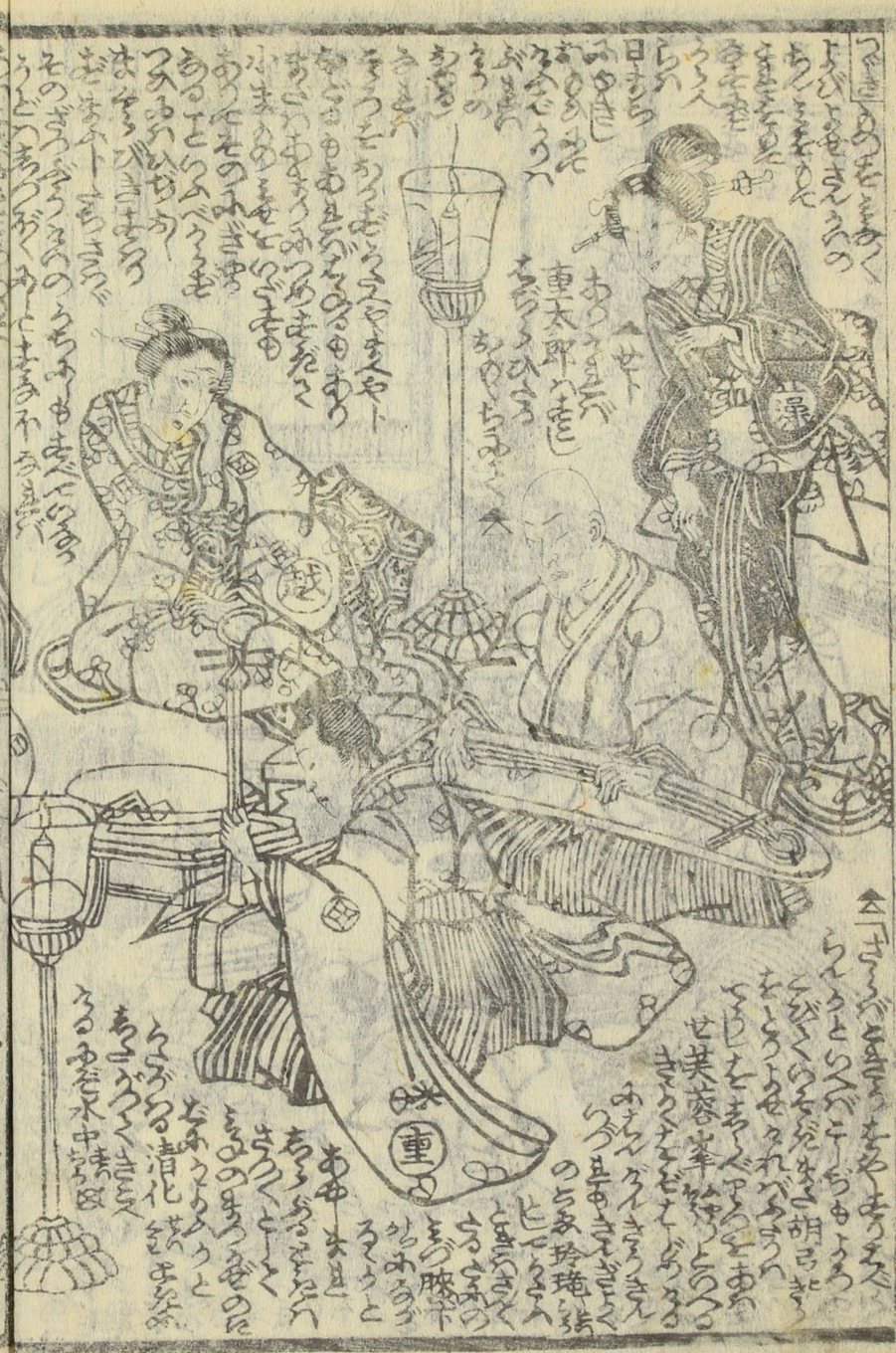
戴文の裝衣

天津の長者
渡邊左門
時方
左門
一子女牛
姜の山鳥右衛門
天津の
太郎
時員
鷲塚の紛重太郎實ハ楠
正行朝臣の孫女
弥生御前
楠の
舊臣
鷲塚重
右衛門元賢

樵夫實者山名氏清の臣
赤橋大膳
頼季
再出
女牛若の山鳥

菊池武重の臣
小森當意軒
道入實者
黒人
金魚




瀑
重

左
山

車
山

侍
左
元
作

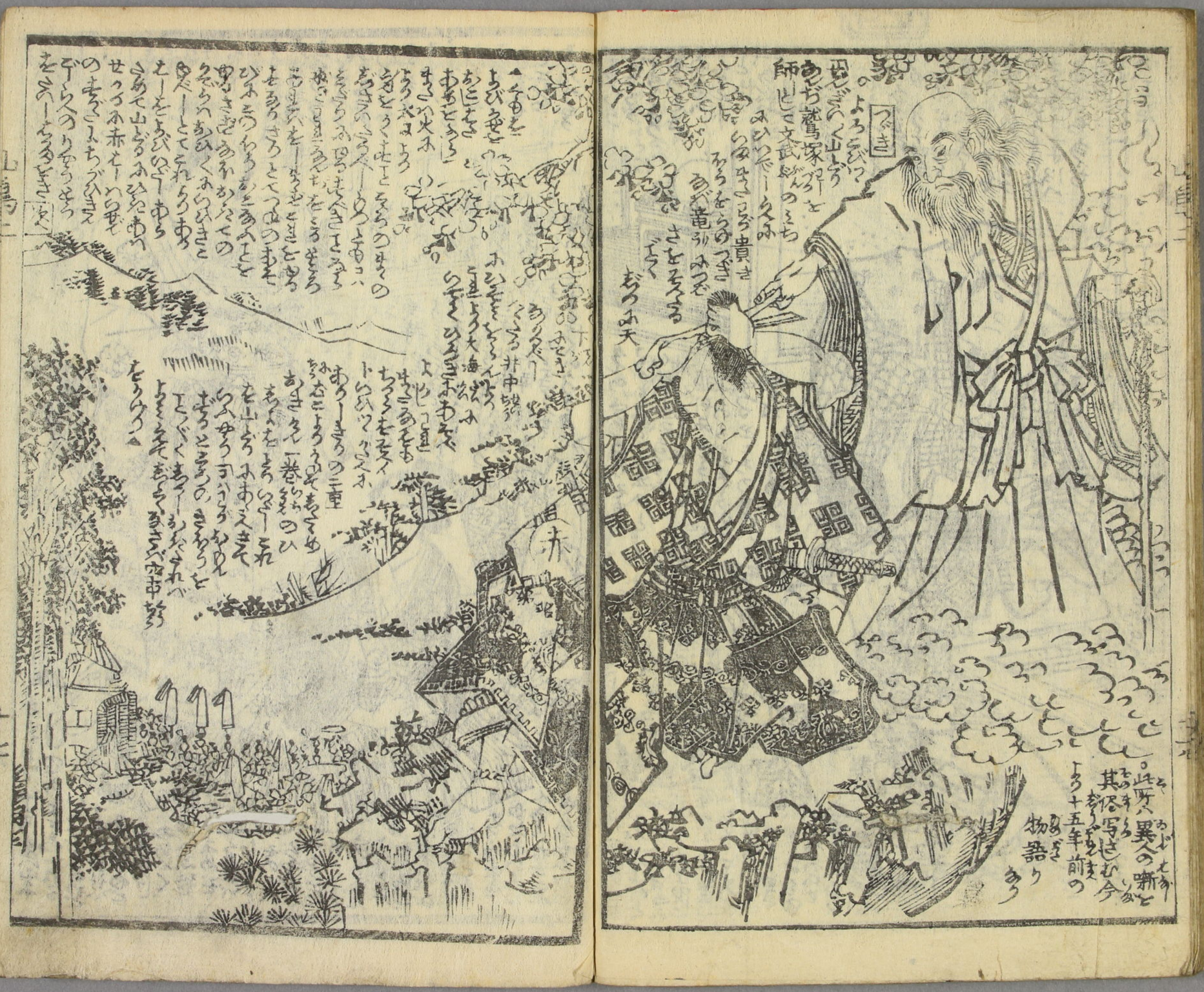
秀賀作
國周画
佞
山
車

山

三平さま

きとう
山ぎう

赤
雲


つゞき
此所ハ異人の噺と其侭写さむ今より十五年前の物語り

東
赤
山

元治二歳乙丑初秋開版目録

武田膏

芝人形町通り 飯島啓三郎謹製

大貝百匁

小貝二十錢
中貝四十八錢

神仙一角丸

氣の毒ぢ 小兒五疳諸病ふせし

調合所 上總国 東金町 大野傳兵衛

周防染櫻模様	四編	貞雅作	五編	國貞画
梅春霞引始	三編	魯文作	讀切	國周画
濡衣女鳴神	十編	秀賀作	讀切	國貞画
假枕巽八景	二編	魯文作	讀切	國周画
道外江戸名所	大錦絵 五十枚	景画	續	

全

地本双紙 問屋 金松堂

横山町三丁目 辻岡屋文助梓